

# 主格助詞「が」に係る述語の拡大

## — 上代から中世までを対象に —

金 銀 珠

キーワード：助詞「が」 主語 述語の拡大

### 1. はじめに

助詞「が」が歴史的に主格助詞として確立し、現在のような使い方をするようになるためには、色々な制限から自由になることが必要であった。主要な制限と主格助詞として確立していくための課題であった点を次に挙げる。①古代語の助詞「が」の前に接続する語が人主語を中心とした有情物主語が多かったことから、有情物主語から多様な種類の主語に拡大していくことが必要であった。また、②助詞「が」に係っていく述語も活動を表す動詞が多かったことから、活動動詞以外の述語に拡大していくことも重要であった。さらに、③助詞「が」は「我が愛する妹」のような連体節の中で主語を表す例に集中していたので、従属節、主節など多様な構文構造の主語になることが必要であった。この中で従来の研究では、特に①に関する議論が多くなされ、③に関しても一定の成果が見出されている（野村1996、山田昌裕2010等）。しかし、②の述語の拡大の様相に関しては、未だ分からないことが多い。主格助詞「が」に係る述語がどのように拡大したかについては、中世前期の原拠本平家物語と中世末の天草版平家物語を比較し、その拡大の様相を見る論がいくつか見られる（小林2000、山田昌裕2000a,b）。ただし、両者の間には約400年ほどの大きな時間的差があるため、どのような過程を経て述語が拡大していったのかについては未だ分からないままである。そこで、本稿では上記の②の問題に注目し、述語の拡大の過程の様相を明らかにしようとする。

考察は上代から中世までを対象とし、使用する言語資料は、『万葉集』『源氏物語一』『平家物語上（覚一本）』『徒然草』『応永二十七年本論語抄卷一～卷四』（以下、論語抄と略）『天草版平家物語』（以下、天草版と略）である<sup>(註1)</sup>。挙例は、注釈書の本文によるが、漢字を常用漢字体に統一し、表記を一部改めた。

## 2. 考察

本節では、主格助詞「が」の述語の拡大の様相について、まず動詞・形容詞・名詞述語全体を考察し、次に動詞のみに注目し詳細に論じる。

### 2.1. 主格助詞「が」に係る述語の拡大

主格助詞「が」に係っていく述語については、従来の研究において、中古まで活動を表す動詞が多かったのが（高山2014、金2016）、中世末頃になると活動を表さない動詞類や形容詞にまで拡大していることが指摘されている（小林2000、山田昌裕2000a, b）。しかし、その拡大の様相についてはまだ明らかにされていない。本節では主格助詞「が」の動詞・形容詞・名詞述語への拡大について大まかに考察する。まず、主格助詞「が」に係っていく述語を活動動詞・非活動動詞・形容詞・名詞に分けて、上代から中世末までの推移を次の表1にまとめる。活動動詞とは、動作主または思考認知主による意志的な行為や活動を表す動詞で、非活動動詞とはそうではない動詞を指す。なお、形容詞には形容動詞を含む。

表1 主格助詞「が」に係る述語の拡大

	活動動詞	非活動動詞	形容詞	名詞	合計
万葉集（7C後－8C後）	96（90%）	10（9%）	0（0%）	1（1%）	107
源氏物語（1010）	23（92%）	1（4%）	1（4%）	0（0%）	25
平家物語（1220以前）	98（75%）	28（22%）	1（1%）	3（2%）	130
徒然草（1336）	22（96%）	0（0%）	1（4%）	0（0%）	23
論語抄（1420）	84（59%）	42（29%）	10（7%）	7（5%）	143
天草版（1592）	342（43%）	348（44%）	88（11%）	15（2%）	793

※網掛け：用例の増大が顕著な時期、以下の表同様。

表1を見ると、主格助詞「が」に係っていく述語は、従来の研究で指摘されているように、中古までは次の(1)(2)のような活動動詞が9割ほどを占め、非常に偏った使い方を示している。

- (1) 旅にても喪なく早来と我妹子が結びし紐はなれにけるかも（万葉集3717）
- (2) なほさて待ちつけきこえさせんことのまばゆければ、小君が出でて去ぬるほどに〜。（源氏物語帚木、110p）

しかし、中世前期の平家物語から活動動詞は徐々にその割合が減っていき、中世末の天草版では4割程度に下がっており、他の述語が勢力を拡大してきている。活動動詞以外の拡大の様子を見ると、まず(3)のような非活動動詞が中世前期の平家物語から増え始め、中世末の天草版では活動動詞とほぼ同じ4割強の使用率を見せている。次に(4)のような形容詞が非活動動詞より少し遅れて、中世後期の論語抄で用例が徐々に増え、中世末の天草版では全体の中の使用率は1割程度でそれほど高くないが、用例数は88例で非常に増えている。最後に(5)のような名詞は中世末の天草版まで用例数が少なく、使用率も形容詞より低い。

(3) 「～。ただ愚老がともかうもならむやうをきこしめしはてさせ給ふべし」  
とあそばされたりければ、～。(平家物語卷三、258p)

(4) いま五十町ばかりを待ちつけさせられいで討たれさせられた宮の御運のほどがうたてい。(天草版卷二、136p)

(5) 「もしこのことが夢ならば、さめてのちは、なんとせうぞ」と悲しまるれば～。(天草版卷一、87p)

以上をまとめると、上代から中世末までの主格助詞「が」の述語は「活動動詞→非活動動詞→形容詞(→名詞)」の順番で広がっているのが分かる。語の意味特性の面から見ると、「活動→状態」の方向である。

次節では、中世末に活動動詞と同じ割合まで拡大した非活動動詞に注目する。形容詞、名詞述語については紙幅のため、ここでは割愛する。

## 2.2. 非活動動詞の広がり

非活動動詞は語彙数も多く、考察の便宜上、意味によって以下の(6)のように再分類する。

### (6) 非活動動詞の分類

- a. 感情感覚：思ほゆ、見ゆ、聞こゆ、覚ゆ
- b. 変化：成る、死ぬ、滅ぶ、絶ゆ、降る、燃ゆ、出来、移る、開く、生ゆ、暮る、敗る、零る、落つ、始まる、尽く、等
- c. 存在：ます、あり、居り、候、ござる
- d. 状態：聳ゆ、冴ゆ、劣る、漫々とす、峨々とす、等

この分類に従って、その歴史的変化を次の表 2 にまとめる。

表 2 主格助詞「が」に係る非活動動詞の拡大

	感情感覚	変化	存在	状態	合計
万葉集（7C 後－8C 後）	4	4	2	0	10
源氏物語（1010）	0	1	0	0	1
平家物語（1220 以前）	1	17	10	0	28
徒然草（1336）	0	0	0	0	0
論語抄（1420）	1	34	4	3	42
天草版（1592）	19	130	180	19	348

まず全体から見て、非活動動詞の語類の広がりについて考察する。

感情感覚動詞は(6 a)に挙げた語がすべてで所属語彙が少ない。使用例も中世末になるまでさほど増えておらず、あまり変わらない。最も顕著な拡大を見せているのは(6 b)変化動詞と(6 c)存在動詞である。変化動詞と存在動詞は中世前期の平家物語から用例が増え始め、中世末の天草版になると、かなりの用例数を占めるに至っている。中でも(6 c)の存在動詞は所属語彙がかなり限られているにも関わらず、中世末の天草版での使用例は非活動動詞全348例中180例（52%）を占めるに至っており、著しい増加を見せている。(6 d)の状態動詞は最も遅れて中世後期の論語抄から用例が見え始めるが、中世末の天草版平家物語でも用例数はさほど多くない。

以上、全体から見て非活動動詞は「変化動詞・存在動詞→状態動詞」の順で使用を拡大しているのが分かる。中世末までに顕著な伸びを見せている変化動詞と存在動詞がどのように拡大したのか、以下、それぞれについてさらに詳細に考察する。

## 2.2.1 変化動詞の広がり

本節では、変化動詞の拡大についてその語種による拡大の様子に注目する。変化動詞は非活動動詞の中で最も語彙が多く、考察に必要なため、(7 a)の位置変化を表す動詞と(7 b)の状態変化を表す動詞に分ける。このように2つに分けるのは、(7 a)の位置変化は、「(炎が) 燃えゆく」「(頭が) 沈む」等のように主語の非意志

的な位置変化という動き (MOVE) が伴われるが、(7b)の状態変化はそれがなく、変化そのもの (BECOME) と変化した後の状態 (BE) に意味的特徴があるという、両者の違いを考慮したためである。

状態変化を表す(7b)は、歴史的な変化の推移をより捉えやすくするため、「成る」と「出現・消滅」を表す動詞、「自然発生的な状態変化」を表す動詞にさらに分ける。(7b)の状態変化を表す動詞の中で、b1の「成る」に所属する語は「成る」一語のみである。「成る」だけを別に行っているのは、これが変化動詞の基底にある「変化」の意味を表す典型的な動詞であり、比較的早い時期から用例数が一定程度見られ、安定した用いられ方をしているためである。b2の「出現・消滅」を表す動詞は、有情物または物事の出現や消滅を表す語類である。b3の「自然発生的な状態変化」を表す動詞は、対象物の自然な状態変化を表すものである。(7a)(7b)に収まらない語類はその他にまとめる。

## (7) 変化動詞の分類

### a. 位置変化

(頭) 沈む、(炎) ゆく、(軒) まはる、(骸骨) 出づ、(水) 流る、等

### b. 状態変化

b1. 「成る」：成る

b2. 出現・消滅：死ぬ、逝去す、失す、出来、現る、尽く、消ゆ、絶ゆ、等

b3. 自然発生的な状態変化：つぶる、暮る、腫る、伸ぶ、(夜) 明く、静まる、残る、外る、吹く、降る、等

(7)の分類に従って、変化動詞の歴史的変化を示すと、表3のようになる。

まず、位置変化を表す例を見る。位置変化を表す用例は万葉集の時期から見られる。(8)の万葉集の用例で、述語「なる」(私の住む里に君が近くなれば)は、非意志的な主語「君」の位置変化 (MOVE) を表している。(9)の平家物語の用例では「炎」が町を飛び越えて「やけ行く」様子を、(10)の論語抄の用例では「唐傘の軒」が「まわる」様子を非意志的な動き (MOVE) として描いている。このような非意志的な位置変化の動きを表す用例は徐々に増え、中世末の天草版になると「行く、流る、落つ、燃え行く、浮かぶ、沈む、零る」など、様々な語彙が用いられるよう

表3 主格助詞「が」に係る変化動詞の拡大

	位置変化	状態変化			その他	合計
		成る	出現消滅	自然発生*		
万葉集（7C後-8C後）	3	0	0	1	0	4
源氏物語（1010）	0	1	0	0	0	1
平家物語（1220以前）	3	9	4	0	1	17
徒然草（1336）	0	0	0	0	0	0
論語抄（1420）	4	9	8	8	5	34
天草版（1592）	20	17	40	47	6	130

\*「自然発生」は「自然発生的な状態変化」の動詞を指す。

になる。

(8) 里近く君がなりなば恋ひめやともとな思ひし我れぞ悔しき（万葉集3939）

(9) 大きな車輪の如くなるほむらが、三町五町をへだてて、戌亥のかたへすぢかへにとびこえとびこえやけゆけば、～。（平家物語巻一、91p）

(10) 唐笠ノ軒カマハレハ嶋モツレテマワル所ヲハ、不去。（論語抄第二、72p）

位置変化を表す述語に特徴的な点は、ほとんどが無生物主語を取る点である。古代語では、助詞「が」の前に来る主語は人主語を中心とした有情物主語に非常に偏っていたが（此島1956、野村1993、高山2014、金2016等）、(7a)の動詞類はこの傾向に反しながら、各時代に一定の用例数が見られる。ここで、非意志的位置変化を表す動詞が述語として早い段階から見られるのはなぜだろうか。これは、意志性がない無生物主語を取る点では当時の「が」の傾向と異なっているが、位置変化という「動き」を表す点で活動動詞と意味的関連性があったためではないかと考えられる。位置変化に伴われる移動という動き（MOVE）は主語の非意志的活動とも言い換えられ、このような述語の意味的な性質の共通性を基盤として、活動動詞から非意志的位置変化を表す述語へと拡大したのではないかと考えられるのである。

次に、状態変化を表す述語について見る。まず、「成る」について見ると、比較的早い時期から用いられ、どの時期においても安定的に用例が見られる。状態変化を表す「成る」の用例は(11)のように源氏物語の時期から見られる。(11)では人主語「まろ」の状態変化（不具になる）を表している。このような人の状態変化を表す

「成る」の用例は、中世前期の平家物語になると(12)、変化動詞の半数以上を占めるようになり(17例中9例)、用例が顕著に拡大している。

- (11) 「まろが、かくかたはになりなむ時、いかならむ」とのたまへば、～。

(源氏物語末摘花、306p)

- (12) 「～、馬ゆゑ仲綱が、天下のわらはれぐさとならんずるこそやすからね」  
とて大きにいきどほられければ、～。

(平家物語卷四、292p)

「成る」は変化動詞の基底にある意味の「変化」を表す重要な動詞で、中世前期までに用例が顕著に伸びているのは、その後の変化動詞の拡大においても重要な役割を果たしたのではないかと考えられる。例えば、以下で見る人の出現・消滅を表す動詞の用例が見え始めるのは表3を見ると、中世前期の平家物語からである。平家物語では、以上で見たように、人の状態変化を表す「成る」の用例が非常に増えていた時期でもある。人の出現・消滅というのも人の変化状態の1つであることから、両者の意味的な連続性が考えられるのである。

次に、状態変化を表す例で「成る」に次いで、出現・消滅を表す語類が中世前期の平家物語から見え始める。平家物語ではまず人の消滅を表す(13)のような用例が4例見られる(逝去す・先立つ・みまかる・失す)。中世後期の論語抄になると、人の消滅に加えて(死ぬ・死す5例)、(14)のような人の心身の働きの出現を表す用例が見られるようになる(出来2例、現る1例)。このような例の主語は(14)の「不審」で見ると、人主語ではなく、物事を表すものである。ここで興味深いのは、人の心身の働きの出現を表す用例3例中2例が、(14)のように位置変化を本来の意味とする「出来」が述語になっている点である。このように位置変化から派生して出現の意味を表すようになった用例は、天草版においても出現・消滅を表す述語40例中11例を占め(15)、かなりの割合で用いられている。「が」が係っていく述語が位置変化を表す用例は既に万葉集の時代から一定数用いられている。このことから、位置変化を由来とする述語が比較的現れやすかったのではないかと考えられる。また、出現・消滅を表す用例は、論語抄の時期までは人の消滅を表す述語や、位置変化の意味から出現の意味に転じた述語に偏っていたが、天草版になると、(16)のような「尽く」など語の種類がさらに増え(出来、生ゆ、消ゆ、絶ゆ、(心)付く、(忌み)明く、等)、変化動詞全130例中40例(31%)を占めるようになっていく。一旦出現や消滅を表す述語が用いられ、それが定着すると、その後は意味的類似性から語彙



を拡張しやすかったのではないだろうか。

- (13) まづ内府が身まかり候ひぬる事、当家の運命をはかるにも、入道随分悲涙をおさへてこそ罷過ぎ候へ。(平家物語卷三、240p)
- (14) 義理ヲ工夫スレハ不審カ多クテクルソ。(論語抄第二、99p)
- (15) その折しも比叡の山にむつかしいことができたによって、成親卿は私の宿意をしばらくはとどめられてござった。(天草版卷一、20p)
- (16) 兵糧がつくれば、田作を刈り取めて寄せ、～。(天草版卷二、152p)

天草版では次の(17)のように物事の開始・終了を表す例(始まる2例、起こる2例、止む1例)が現れている。分類が煩雑になるため、開始・終了を表す例は出現・消滅の用例に含めている。(17)は合戦の開始であるが、合戦という新しい出来事が出現したとも考えられ、開始と出現は意味上非常に近い関係にある。同じことは消滅と終了についても言え、上記(16)の兵糧が尽きる事態は兵糧の消滅と終了のいずれの解釈も可能である。

- (17) さうして合戦が始まれば、はじめは平家そと勝色にあったれども、阿波の民部心変りをして～。(天草版卷四、343p)

出現・消滅を表す例と関連して注意しておきたいのは、これが、次に見る自然発生的な状態変化を表す用例に比べて、変化(BECOME)が起きたこと自体により焦点を置く例が多いという点である。上記(13)では「内府が死んだこと」、(14)では「不審が出てくること」、(15)では「(ちょうどその頃)騒動が起きたこと」を言っており、変化(BECOME)としての出来事が発生したことにより注目しているのである。これは、出現・消滅がある変化の最初と最後の局面を捉えているという語彙的な特徴も影響していると考えられる。

次に、変化動詞の中で一番後に用例数を拡大しているのが、(18)のような自然発生的な状態変化を表す用例である。これは中世後期の論語抄から増え始め、中世末の天草版では47例に用いられており、語の種類も多様である。

- (18) 子夏カ子死タル時ニ、餘ニ鳴テ目カツツフレタル也。(論語抄第一、48p)
- (19) 「何の宣旨とは」と言うて、太刀がゆがめば躍りのいて踏みなほし押しなほし、たちどころに究竟の者を十五人切り伏せれば、～。(天草版卷二、111p)

- (20) 宗康は足がしたたか腫れて、歩くこともならず、～。(天草版卷三、215p)



このような自然発生的な状態変化を表す用例は、変化とともに変化した後の状態の存続（BE）をも捉えるものが多い。例えば、(18)の下線部は、目がつぶれたという変化と現在もつぶれている状態にあるという両方を捉えている。(19)(20)においても変化とともに曲がっている状態、腫れている状態を捉えている。

以上の変化動詞の拡大の過程を示すと、次の(21a)のようになり、(21a)を簡略化すると(21b)(21c)のようになる。(21b,c)のyは、「が」の前接語の主語で変化の対象を指す。

#### ㉑) 変化動詞の拡大の過程

- a. 位置変化→ 状態変化（出現・消滅→ 自然発生的状態変化）
- b. yの位置変化→ yの変化そのもの→ yの自然発生的状態変化・状態存続
- c. y MOVE→ y BECOME→ y BE

(21a)の状態変化を表す動詞の中で、出現・消滅を表す動詞は先述のように変化（BECOME）そのものの発生により重きがある例が多く、(21b)では「変化そのもの」と示した。また、自然発生的な状態変化を表す例は変化とともに変化した後の結果の存続（BE）を捉えているものが多いため、「自然発生的状態変化・状態存続」と示した。

さて、㉑)の変化動詞の拡大の過程をどのように解釈するか、その意義付けについて考えてみたい。

㉑)の過程で、変化動詞は、位置変化（MOVE）→変化（BECOME）→状態（BE）へと状態性が高い方へと拡大していることが言えそうである。この拡大の過程では、yという変化の対象の動きがあってyが変化し、その変化による結果状態が存続するという一連の連続した意味的なスペクトラムが見られる。ここで、この過程が、影山（1996, 2001）で論じられている他動詞の語彙概念構造の行為連鎖と類似することに注目したい。影山（1996, 2001）では、典型的な他動詞<sup>(注2)</sup>の語彙概念構造を次の㉒)のように示している。

#### ㉒) 影山（1996, 2001）の他動詞の語彙概念構造

＜xが行為・活動＞ cause ＜yが変化＞ → ＜yの状態＞

㉒)のxは行為主で、yは行為主の行為を受ける対象物である。㉒)の語彙概念構造

は、例えば行為主  $x$  が切るといふ行為をし、対象物  $y$  に切れ目が出来（変化）、 $y$  が真っ二つの状態になったというような行為連鎖による意味構造を反映したものである（影山2001：6）。

本稿の変化動詞は、行為主がなく、非意志的な変化の対象がある自動詞であり、②では  $y$  の変化と状態の部分の意味範囲をカバーしている。ただし、②の語彙概念構造で  $y$  自体の動きによって  $y$  が変化状態になると考えれば  $x = y$  になり、②から(21c)の意味構造が見出される。

このように、変化動詞の拡大のプロセスは他動詞の行為連鎖による意味構造と近似し、意志的な行為主があるかどうかは別として、特定の動きをし、その動きによって変化が生じ、変化した後の状態に至るといふ一連のプロセスは同じなのである。そもそも語彙概念構造は、外界の出来事を認識し動詞として言語化する際の基本枠を②の「行為」「活動」「変化」「状態」などのように提供し、新しい動詞が作られる場合もこのような普遍的と思われる意味構造の枠に基づいて作られるという考え方から設定されたものである。

ここから本稿では、「が」が係っていく変化動詞の歴史的な拡大の過程が②1のように現れるのは、①普遍的と思われる動詞の意味構造の枠の中で歴史的変化が起きているためで、②歴史的拡大の過程は、外界の世界を言語化する際の認知の仕方である行為連鎖の順番と関連づけて説明できる、と考えたい。

## 2.2.2 存在動詞の広がり

非活動動詞の中で、存在動詞に所属する語は(6c)に挙げた例が全部で語数が限られているので、その広がりを見るには存在動詞の種類そのものより、どのような用法が拡大していったかを考察に入れる必要がある。存在動詞の例は、表2で見ると、万葉集の時代から見られる。ただ、用例が増え始めるのは中世前期の平家物語からで、中世末の天草版にかけて著しい増加を見せている。中世前期から中世末までで顕著なのは、まず主語の側面から見ると、人主語を中心とした有情物主語から②3のような物事主語を取る例の増加である（存在動詞の物事主語：万葉集2例中0例、平家物語10例中4例、論語抄4例中2例、天草版180例中122例）。

②3 今は御装束があらばこそ、御所にもさぶらはせ給はめ。

（平家物語巻六、427p）

しかし、存在動詞の用例が増えたのは単に主語の種類が広がったことだけによるのではない。というのは、存在動詞が特定用法において著しい増加を見せているからである。最も顕著な拡大を見せているのは、以下の②4～②6のように、話の展開の中で特定の人や物事を聞き手（読み手）に新しい情報として差し出す場合の用例である。以下、このような用例を「新情報提示用法」と呼ぶことにする<sup>(注3)</sup>。

②4 「～左兵衛尉長谷部信連が候ぞ。ちかう寄ってあやまちすな」とぞ申ける。  
(平家物語巻四、288p)

②5 八条に政時といふ侍があつたが、暮れ方に土肥の次郎がもとに来て申したは～。  
(天草版巻四、295p)

②6 「もしこの辺にわが方様の者やある、船に乗らぬ先に言ひおかうずることある。たづねて参らせよ」と、言はれたれば (天草版巻一、54p)

②4は自分自身（長谷部信連）がいることを聞き手にまず知らせ、聞き手に注意しろと言っている場面である。②5は話の展開で特定の人物について最初に紹介しており、②6は言いたいことがあるということを新情報として聞き手に伝えている場面である。

このような新情報提示用法は、平家物語から増え始め（平家物語存在動詞10例中4例、論語抄4例中2例）、中世末の天草版では存在動詞全180例中110例に用いられる。新情報提示用法が存在動詞の拡大に大きく関わっていることが分かる。

このような存在動詞の新情報提示用法は現代日本語のニュースの出だしなどで聞き手にとっての新情報が「昨日、千種区で火事がありました。」のように「が」で表される用法と同じである。このような用例が平家物語から見え始めるのである。

新情報提示用法の次に目立つのが、次の②7②8のような反語疑問文である。

②7 「この川の深さ、浅さも利根川にいかほどの劣り勝りがよもござらうぞ？  
いざ渡さう」と言うて、～。  
(天草版巻二、130p)

②8 これほど心が甲斐なうては、仏道があるものか、ならぬものかと心に心を  
恥ぢしめて、急いで人を出いて、～。  
(天草版巻四、308p)

②7の下線部は「この宇治川の深さや浅さも利根川とどれほどの相違がありましょうか。」のような意味であるが、すぐ後の文で「(まずそんなことはない。) さあ、渡そう」と言っており、下線部で話し手が言いたい内容は文の内容と反対になっている。②8も同様に「これほど心が不甲斐なくては、仏道修行が出来るものか」の後に

「出来ないものかと心中恥ずかしく思って」のような意味が続いていることから分かるように、言いたいことと反対の内容を疑問の形で述べている。このような反語疑問文の用例は新情報提示用法より遅れて中世末の天草版において出現している。存在動詞全180例中19例が反語疑問文の用例である。

以上、存在動詞の特徴的な用法の広がりについて整理した。

では、主格助詞「が」の後に来る存在動詞が、新情報提示用法と反語質問文に用いられるようになった原動力は何であったのだろうか。

新情報提示用法は、話し手が聞き手の了解事項をどう踏まえ提示するかという情報構造のレベルの用法である。したがって、助詞「が」が新情報提示用法で多用されているのは、主語を表すという統語的なレベルの機能に加えて、「が」の情報構造のレベルにおける機能も顕著になってきたことを意味する。新情報提示機能の「が」で示される内容は聞き手にとって新しい情報であるため、焦点が置かれる。

また、反語疑問文は、話者の言いたいことと敢えて反対の内容を疑問の形で表すことで、逆に本来の言いたいことが強調される表現法である。強調は談話的に際立っている部分であり、際立ちという点は新情報提示用法の焦点と似ている。

助詞「が」の情報構造のレベルの新情報提示機能と談話的際立ちの用法が顕著になってきたのは、「が」の指示機能を基盤として出来たものではないかと考えられる。金（2016, 2019）では、成章『あゆひ抄』（1778刊、三・乃家・何が）、山田孝雄（1954：409）、此島（1956：47）の論を継承発展させ、上代・中古の助詞「が」の文法機能を「指示」機能にあると論じた。指示とは「ある対象を指示し、事柄把握の中心に置く機能」（金2019：9）を指す。「が」の機能を指示と論じたのは、「が」の前接語が「わ」「佐用姫」「道頼」「殿の若子」などのような特定の対象を指示する語に非常に偏り、特定の対象を指示することで、「が」の前接語に注目しやすい状態になっているためであった。ここで、あるものを特定して指示するという機能は、指示される対象に焦点を合わせやすく、指示という機能が聞き手にとって新しい情報を伝える焦点になる部分と談話的際立ちの部分に馴染みやすかったのではないかと考えられる<sup>(注4)</sup>。すなわち、主格助詞「が」の後に来る存在動詞が、新情報提示用法と反語質問文に用いられるようになった原動力は、「が」に備わっていた「指示」機能を基盤としてできたものであると考えたい。

### 3. まとめ

本稿では、上代から中世末にかけて、主格助詞「が」が係っていく述語がどのように拡大したのかについて考察し、(29)のような拡大の過程を明らかにした。

#### (29) 主格助詞「が」が係っていく述語の拡大の過程

- a. 述語全体は「活動動詞→非活動動詞→形容詞（→名詞）」の順に拡大した。
- b. 非活動動詞は「変化動詞・存在動詞→状態動詞」の順に拡大した。
- c. 変化動詞は「位置変化→状態変化」、「y MOVE→ y BECOME→ y BE」の順に拡大した。これは、動詞の基本的な意味構造の枠の中で、外界の世界を言語化する際の認知の仕方である行為連鎖の順番と関連づけて説明できる。
- d. 上記a～cまでの過程を時期を合わせてまとめると、次のようになる。

(29a)～(29c)の変化は、いずれも状態性が高い方へと拡大している。



- e. 非活動動詞の存在動詞は、特に新情報提示用法において著しく拡大し、反語疑問文のような談話的際立ちを見せる部分でも拡大した。このような用法への拡大は、「が」の指示機能を基盤として出来たものと考えられる。

(29e)については、「が」の指示機能との関係についてより詳細な考察が必要である。また存在動詞の用法についても「が」が連体形を前接語として取る構文との影響関係が考えられるが、紙幅のためここでは割愛した。ともに今後の課題とする。

#### (注)

(注1) 資料：『万葉集』は山口大学万葉集データベース、『平家物語上（覚一本）』『源氏物語一』『徒然草』は小学館新編日本古典文学全集、『応永二十七年本論語抄巻一～巻四』は抄物大系、『天草版平家物語』は江口正弘（1986）『天草版平家物語対照本文及び総索引』（明治書院）を使用した。なお、万葉集の「が」の用例は『万葉集索引』（塙書房、2003）を参考にした。ただし、元の万葉仮名で書かれたものには助詞がないのに注釈で「が」が挿入されている例や「の」とも読める「之」の漢字が使われている例は対象か

ら除外した。また、『万葉集』以外の資料では、歌の用例は除外した。資料は、述語の拡大の変化が著しいと考えられる中世の場合、おおよそ百年単位で変化が考察出来るように選定した。しかし『徒然草』の場合、用例数が少なく、有意義な変化が読み取れないことが多かった。1300年代は資料が限られているため選定が難しいが、今後代替可能な資料を補充し、適切な考察が出来るように改善していく必要がある。

(注2) 他動詞はより厳密に言えば、使役他動詞の能格動詞のことを言う。

(注3) 新情報提示用法で多用される構文パターンも見られる。㉓のように「(主語名詞ガ＋存 在動詞)＋接続助詞ガ(ヲ)」の構造で示されるもの、㉔のような「～事がある(ござる)」のパターン及び「～「子細・旨・所・習い・例」がある(ござる)」の「事」以外の形式名詞的なものを主語として取るパターンが比較的多い。㉕のような文末で助詞「ぞ」が用いられるパターンも比較的小数であるが見られる。

(注4) 久島(1986)、大野(1993)、山田昌裕(2001, 2010)のように、助詞「が」が主格助詞として拡大したのは、助詞「ぞ」が衰退したあとに、強調表現の主語の位置に入ったためと見る論もある。これらの論は主に主節における「が」の用例を「ぞ」と比較したもので、主節においてはそのような傾向が観察されるのだろう。しかし、主格助詞「が」は中世末までに主節だけではなく従属節にも勢力を拡大している。また、「ぞ」に取って変わったのは「が」だけではなく、「ぞ」の位置に入ったとしてもなぜ「が」がその位置に入ったのかは不明である。筆者は新情報提示機能を含めて反語疑問文のような強調表現に「が」が進出したのは、本来助詞「が」が文法機能として持っていた「指示」機能を基盤としてできたものであると考える。

## 参考文献

- 大野晋(1993)『係り結びの研究』岩波書店  
江口正弘(1995)「天草版平家物語の「が」・「の」について」『国文学巧』146  
影山太郎(1996)『動詞意味論一言語と認知の接点一』くろしお出版  
影山太郎編(2001)『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店  
金銀珠(2016)「中古語の名詞修飾節における主語の表示―無助詞と「の」と「が」の相互関係一」『日本語の研究』12-4  
金銀珠(2019)「古代日本語の助詞「が」の機能について」『Trans/Actions』4  
此島正年(1956)「古代における格助詞「が」」『国学院雑誌』57-7  
小林茂之(2000)「中世における主格助詞表出の一変化について」『国語と国文学』77-12  
高山道代(2014)『平安期日本語の主体表現と客体表現』ひつじ書房  
野村剛史(1993)「上代語のノとガについて(上)(下)」『国語国文』62-2,3  
野村剛史(1996)「ガ・終止形へ」『国語国文』65-5  
久島茂(1986)「格助詞ガの意味の分化について」『静岡大学教育学部研究報告人文・社会』36  
富士谷成章(1778刊)『あゆひ抄』(1936松尾捨次郎校註『国語学叢書第二編』大岡山書店)

- 山田昌裕 (2000a) 「主語表示「ガ」と「ノ」—原拠本『平家物語』と『天草版平家物語』との比較—」『立正大学国語国文』38
- 山田昌裕 (2000b) 「主語表示「ガ」の勢力拡大の様相—原拠本『平家物語』と『天草版平家物語』との比較—」『国語学』51-1
- 山田昌裕 (2001) 「主語表示「ガ」の強調表現における勢力拡大の様相—「ゾ」との関連性において—」『国語国文』70-8
- 山田昌裕 (2010) 『格助詞「ガ」の通時的研究』ひつじ書房
- 山田孝雄 (1954) 『奈良朝文法史』宝文館

<付記> 本研究はJSPS科学研究費（基盤研究C、課題番号20K00629）による成果である。

（きむ・うんじゅ／名古屋工業大学准教授）